

台湾観光

643

2025
SEP・OCT

日本語版
www.tva.org.tw

LIVE MUSIC

TAIWAN

人生。

音楽。

ライブで 音楽 の 魅力 を

体感しよう！

鉄道の記憶から
客家の山への文化散歩

鶯歌：陶芸とアートが
交差する旅

台湾プロ野球観戦
完全ガイド！

TAIWAN

WAVES OF WONDER

Enjoy NOW

癒される旅・台湾

大都市から郊外まで、心と身体の願いを満たす日々

台湾でくつろぐ一刻をじっくりと堪能しませんか

www.taiwan.net.tw



交通部觀光署
Tourism Administration, MOTC



Cover Story

FEATURES

004 Cover Story

LIVE IN TAIWAN !

生で聴くべきスペシャルな音楽

TRAVEL INSPIRATION

024 島旅デビュー

鉄道と客家の交差点

鉄道の記憶から客家の山への文化散歩

028 町さんぽ

新北市・鶯歌：陶芸とアートが交差する旅

032 愛しい台湾味

百通りのおいしさ：台湾麺料理の旅

034 SPORTY TAIWAN

台湾プロ野球観戦・完全ガイド！

036 コラム

台湾鉄道観光：台湾一周スロー旅 × 支線で秘境探し

040 コラム

FOUNTAIN 新活水 第23回

042 コラム

台湾・風景・詩



島旅デビュー



町さんぽ



愛しい台湾味

会長・発行人／簡余晏
榮譽会長／葉菊蘭
副会長／蘇成田、凌瑞、莊豐如
編集顧問／鍾逸寧、陳婷妤、張仲宇、林詠欣
発行所／財団法人台湾観光協会
〒台北市忠孝東路4段285号8F-1
TEL +886-2-2752-2898
FAX +886-2-2752-7680
E-mail yasir@tva.org.tw
https://www.tva.org.tw

台湾観光協会東京事務所
〒日本国東京都港区
西新橋1丁目5-8 川手ビル3F
TEL +81-3-3501-3591
FAX +81-3-3501-3586
E-mail tyo@go-taiwan.net
台湾観光協会大阪事務所
〒日本国大阪府北区西天満4丁目14番3号6F
TEL +81-6-6316-7491
FAX +81-6-6316-7398
E-mail osa@go-taiwan.net

制作／故事 StoryStudio
編集長／徐豐恩
編集統括／林家豪
編集協力／劉亞涵、大洞敦史
デザイナー／謝喬仔
コンサルタント／鳳氣至純平
特約作者／吳寧謬、鄭雅文、林芷婕、游姿穎
翻訳者／台灣北菱股份有限公司、
津村葵、賴英泰
プロジェクトマネージャー／冉揚、林宛豪

〒台北市承德路一段8号7楼-1
TEL +886-2-2369-5966
E-mail contact@storystudio.tw
https://storystudio.tw/
印刷／經緯印藝實業有限公司
台湾観光庁
E-mail tad@tad.gov.tw
https://taiwan.net.tw
https://jp.taiwan.net.tw/

台湾観光 Facebook



台湾観光 Instagram



交通部觀光署サイト



LIVE IN TAIWAN！

生で聴くべきスペシャルな音楽

人々の熱気が、波のようにうねり沸き立つ音楽フェス。深夜にパワーが炸裂するライブハウス、掘り出し物の隠れた街角のレコードショップ、そして南の海風に乗って響く島の歌声。台湾の声が、音が、リアルタイムで生まれていきます。

この衝撃と魅力は、ライブでこそ感じられるものです。今号のカバーストーリーは、メロディーに耳を澄ませるようにご一読ください。現場ならではの音の旅行に出かけましょう！

text／編集部 photo／陳建豪、Rafael Wu、Kris Kang、朱靖閔、大港開唱、笨道策展有限公司、Marsalis Bar、TCRC Livehouse、民生電氣、台北流行音樂中心、THE WALL LIVE HOUSE、Legacy Taipei、聲色、台北爵士音樂節、秋 OUT 音樂節、半島世界歌謡祭 illustration／sheep babe

音楽。

大港開唱

TRACK
2

個性豊かな新旧が共存する場所
台北西エリアの音楽シーン

TRACK
3

恆春半島歌謡祭
南島の歌声の記憶

TAIWAN

LIVE

MUSIC

ライブで音楽の魅力を
体感しよう！

人生。

TRACK
1

エネルギッシュな台湾の音楽フェス！
南台湾のリアルなミュージックシーンを体感

B-SUNS
TRACK

耳を使って旅をする
台北の音楽風景を歩く

TRACK

1

エネルギーシユな台湾の音楽フェス！

南台湾のリアルな

ミュージックシーンを体感

高雄港の埠頭、ずらり連なった大型コンテナと海に挟まれた会場に数万人もの観衆が集い、一斉に歌い、飛び跳ね、タオルを振る。台湾南部を代表する音楽フェスティバル「大港開唱（Megaport Festival）」のいつもの光景です。「これを見ると、この街が皆と一緒に音楽をかき鳴らしているのを感じるでしょう？」と、ステージに立つアーティストの視点から薑薑（ジャンジャ）は語ります。

この音楽フェスは2006年、高雄の港湾エリアを舞台に、民間からの自発的な取り組みによって誕生し、現在では台湾で最大かつ最も象徴的な、インディーズ音楽フェスへと成長を遂げました。拍謝少年のメンバーとして長年参加している薑薑は、ミュージシャンとしてだけでなく、客席から声を張り上げて合唱したり、ブースをそぞろ歩く一人の音楽ファンとして

もこのイベントを楽しんでいます。「大港開唱は、今や単なる音楽フェスの枠を超えて、高雄をはじめとする台湾南部に根ざす暮らしの一部になりました。」薑薑が暮らしと呼ぶものは、鹽埕（えんてい）の街に足を踏み入れ、港と都市とが共鳴して醸し出す空気を肌で感じ、潮風と食欲をそそる屋台の匂いが混じり合う会場で、各地から集まった音楽ファンに囲まれながらビールをおおるといような、ここ南部でしか体験できない生活リズムと自由の気配を指しています。

南部のライブシーンが特別なわけは、観客が自分のパッションを惜しみなく露わにし、心から音楽に没頭している点にあります。大合唱やモッシュ、熱狂的なアンコールの叫び声、それらはどれも誰かに要求されたものではなく、ごく自然に観客の間から生じるもので、熱いパフォーマンスの一部となっています。

「毎年、たくさんの日本のバンドが大港開唱に参加していますし、僕たちもよく日本でライブをします。台湾の観客は情熱的で、僕らが投げかけるものにストレートに伝えてくれますが、こういった感じは日本ではなかなか見られませんね。」

大港開唱のユニークさは観客だけでなく、会場そのものにも見られます。高雄のベイエリアに設置されたステージは、ライトレールで容易にアクセスでき、港に並ぶコンテナや線路、埠頭のすぐそばで、周辺には宿泊施設も多い、大変便利な立地です。チケットなしでも楽しめる無料ステージや、創意に満ちた商品が並ぶブースも大勢の人々で賑わいを見せています。「あの空間は都会のオープンなムードに満ちていて、そこに足を踏み入れると、たちまちそこに溶け込むことができるんです。」

また、薑薑はフェスへの参加

時、気分を盛り上げるために彼がやっているルーティーンも教えてくれました。一日の始め、まずは鹽埕エリアで粉漿蛋餅（フエンジャンダンピン）と台湾ミルクティーに舌鼓を打ち、昼は近くの有名なアヒル料理店「鴨肉珍」で腹ごしらえして、陽が沈むまでフェスを存分に楽しんでから、牛肉火鍋か串焼きの店で軽く一杯やって一日をめるのがおすすめです。フェスの合間には、古着やハンドメイド雑貨のブースをぶらぶら見て回るのもいいし、遊覧船に乗って海上からステージを眺めることもできます。「船から見渡せば、音楽が街と一体化しているのを強く感じられますよ。」

また、もっと深くフェスを満喫したければ、1、2日早く高雄に来て、鹽埕エリアをゆっくり散策するのもいいと言います。日中はギャラリーなどで展示を見たり、セレクトショップを探

索したりして、夜はバーに行くのでもいいし、港で風に吹かれながらビールを飲むのも最高です。フェス当日はメインステージに加え、小規模ながらもインディーズの空気感に充ちたサブステージのライブも見逃せません。「ああいうステージは、観客との距離が近いから、パフォーマーと観客が一体感を得やすく、ライブならではの魅力をよりはっきりと感じられる最高の場所なんです。」と薑薑は教えてくれました。

南台湾の音楽シーンは、エネルギーシユで自由奔放。多様な音が混じり合い、この島のもつ情熱的な魂が、最も鮮明に体现されている空間です。それを体験する旅では、予定をあれこれと詰め込む必要は無く、ただ耳と心をオープンにするだけで、この土地のリズムを身体で感じる事ができるのです。



音の旅ガイド

薑薑

(ジャンジャン)

拍謝少年 (Sorry Youth) のベーシスト。拍謝少年は、台湾語をベースに、都会への視点や日常の語感を織り交ぜた曲作りを特徴とするロックバンド。安定したメロディーと観客との一体感を感じさせるパフォーマンスで、ファンの心を掴んで離さない。《海口味 (海の匂い)》、《兄弟沒夢不應該 (夢を見ないヤツなんて)》、《歹勢好勢 (パイセーホーセー)》などのアルバムを発表し、金曲賞や金音創作賞を次々に受賞、大港開唱 (Megaport Festival) をはじめ、国内外の有名な音楽フェスでも長年に渡り活躍している。



大港開唱 (Megaport Festival)

2006年に高雄のバイエリアで誕生した、台湾を代表する音楽フェスティバルの一つ。毎年3月に高雄で開催され、毎回100組以上の国内外のアーティストが参加し、今年は、日本の俳優兼シンガーの広末涼子や、アメリカのサイケデリック・ロックバンドの The Flaming Lips など、豪華なラインナップが揃った。

特徴は、その自由で開かれた空間にあり、チケットを買わなくても、おだやかな海風と音楽が響き合う雰囲気を楽しめるようになっている。さらに近年では世代を超えたコラボやアート体験にも力が入られており、文化と街とバイエリアがひとつになった場で、最上の音の旅を楽しむフェスとなっている。

浪人祭 Vagabond Festival

2019年に産声を上げて以来、数年のうちに南部の重要な音楽イベントの一つとなった。ロック、ポップからインディーズまで幅広くカバーし、環境に配慮した空間作りや、地域との文化交流にも力を入れている。会場は台南・安平のビーチである観夕平台に隣接する芝生エリアで、夕日と海を間近に望める絶好のロケーションだ。通常、10月中旬に3日間にわたって開催される、毎年1万人以上の音楽ファンが集う大規模フェスとして知られ、ライブのほかインスタレーションアート、創作雑貨マーケット、海辺の清掃活動など、体験型コンテンツも豊富に用意される。2025年は、「府城 (台南市街の旧名) ロマン〜星と海のラブソング」というテーマの下、台南の物語と融合させ、世界で活躍するストリートパーformerともコラボする予定。音楽を通じて台湾文化や環境問題への理解も深めていく。

📍 台南市安平區金城里洲安三街 (観夕平台そばの芝生広場)
🕒 2025/10/17 14:30〜10/19 21:30

info





南台湾の夜、 一緒にスウィング・ ジャズを楽しもう！

台南のジャズスポットは、大部分が古い路地のレトロな家屋にひっそりと佇んでいます。そのひとつであるバー「宅・Jhouse」では、定期的に即興ライブやジャズナイトが開かれていて、ウッドチェアに腰かけ、香り高いカクテルを手に耳を傾ければ、堅苦しい音楽理論なんて知らなくても、まるでメロディーが身体の中で息をしているかのような

宅・Jhouse Coffee Bar & Jazz

三階建ての古民家にある台南ジャズの拠点

台南市中西区の集合住宅の3階に構えるこのお店は、ジャズ、レコード、コーヒー、カクテルを取り揃えた個性的な空間で、毎週定期的にライブや選曲鑑賞などのイベントが行われている。本格的なジャズ音楽にリラックスしながら没入するひとときを過ごせる、台南を代表するジャズスポットの一つ。

● 台南市中西区西門路二段25巷1号3階

● 月曜・火曜 19:00-24:00、水曜～日曜 18:00-01:00

info



打ちとけた感覚に身を浸らせることができるでしょう。さらに南の高雄へ行けば、ジャズの雰囲気は港町ならではの、ゆったりとした趣へと変化するのが分かります。高雄の本格的なジャズバーは、多くが2000年代半ばに生まれ、地元のミュージシャンや海外からの訪問者達が集まる定番スポットとなっています。専属のハウスバン

Marsalis Bar 馬沙里斯爵士酒館

ジャズとウイスキーが織りなす大人時間

2007年に創業した高雄屈指のジャズ&ウイスキーバー。新興区に位置する赤レンガ造りの古民家の2階にあり、上質なウイスキーやカクテルを提供している。名士のサロンを思わせる落ち着いた雰囲気が漂い、平日の夜や週末にはジャズやブルースのライブ演奏が行われ、世界的な知名度をもつミュージシャン達もしばしばステージに立つことがある。

● 高雄市新興区中正四路71号2階

● 水曜～日曜 15:00-24:00、月曜・火曜定休

info

ドの定期演奏に、ウイスキーとレザーソファ。優雅でありながら強調しすぎない、紳士的な空間が演出されています。ほろよいに誘うお酒を片手にリラックスして耳を澄まして、南部の土地にいだかれて心地よい夜のスウィングを楽しむ、南台湾を巡り、それぞれの街に根ざしたジャズに触れる旅に出てみませんか。



艾比路唱片行 Abbey Road Record Store

レコードが回るくつろぎの空間

高雄市新興区にある、音楽と飲食を結合させたレコードショップ。店内にはロック、ジャズ、映画のサウンドトラックなどジャンル豊富なレコードが並び、真空管アンプを使った生演奏のような音響を楽しむことができる。まるで友人宅のリビングにいるような居心地の良さが特徴。レコードを買うだけでなく、流す曲をリクエストしたり、料理やお酒を味わいながら音楽を通じた交流ができる、くつろぎの空間となっている。

📍 高雄市新興区錦田路11之1号

🕒 火曜～土曜 12:00-21:00、日曜・月曜定休

info



四四拍唱片行 44 Bit Records

エレクトロニック音楽とランチが融合する空間

2013年の創業以来、エレクトロを主軸としたスタイルを貫いている。エレクトロ、レコード、DJ 養成講座さらにはランチを合わせた複合的なサウンド空間で、来客はIDM、環境音楽、インディーズ系のエレクトロミュージックなどを、熱々のパニーニとコーヒーを口にしながら聴いたりできる。台南の街が持つゆったりとしたリズムと心地よい旋律を感じられる空間だ。

📍 台南市中西区府前路一段85巷26号

🕒 水曜～日曜 10:00-16:00、月曜・火曜定休

info

路地裏を散策して、
お気に入りの一曲を
持ち帰ろう！

南台湾の街角、レコードショップとは単に商品を売る店ではなく、その街の音を詰め込んだ小さな文化スポットのような存在です。台南のレコードショップの多くは、古い家屋や路地裏にひっそりと佇んでおり、またしばしばセレクト雑貨やカフェ、ギャラリートン体になっており、ゆったりとした音に導かれて散歩しているような気分を味わえます。

ここでは、音楽は値札の付いた商品ではなく、コミュニケーションという言葉の一つなのです。高雄を訪れると、レコードショップには一層の熱気と賑わいを感じられます。それはまるで友人宅のリビングのようで、レコードは地域の古い歌からインディーズ系ロック、日本の歌謡曲まで幅広く揃えられており、1枚のレコードに針を落として思い出

を語り合えば、そこで午後をまるまる過ごせるでしょう。スピード感ある大都会と異なり、南台湾のレコードショップは、道ゆく人に足を止めさせ、その街の内なるメロディーに耳を傾けるよういざないます。



OH ROOM

台南中心にある心地よい音のオアシス

台南市東区に位置するこのカフェバーは、DJ、レコードとサウンドアートで人気を博している。毎週土曜日にはDJが店内のレコードから選んだ楽曲をプレイする。また定期的に鑑賞会やサウンドアートのワークショップも開催され、実験音楽や前衛的なサウンドに興味を持つ人々を惹きつけてやまないスポットとなっている。

● 台南市東区東寧路300号

● 水曜～土曜 19:00-24:00、水曜、土曜夜はイベントデー（DJ、ミニマムチャージあり）、日曜～火曜定休

info



TCRC Livehouse

台南の夜を彩るインディーズ音楽のステージ

台南中西区の地下にあり、2006年のオープン以来、インディーズバンドやツアーミュージシャン達に人気のライブ会場となっている。空間はそれほど広くないものの、観客との距離が近く、熱気あふれるやり取りが魅力。台南の音楽ファンやアーティスト達が最も頻繁に集まるライブハウスの一つであり、年間を通じて、ロック、インディーズ系、実験音楽、エレクトロなど幅広いジャンルのライブが定期的開催されている。

● 台南市中西区西門路二段314号B1

● スケジュールの詳細は公式SNS参照

info

南台湾の 音楽スポットの日常

南部では、音楽はイベントの為に準備されるだけのものではなく、日常の風景のひとつであり、コーヒーの香りや夜の景色の中に溶け込んで奏でられています。毎週土曜日にはDJを招いて、環境音楽、実験音楽、リズム感の強いトラックを組み合わせて流し、旅行者は本をめぐったり、コーヒーを飲んだりして過ごすうち、気づかずしてその旋律に自然

と引き込まれているのです。
2006年にオープンしたTCRC Livehouseは、地元のインディーズバンドやツアーミュージシャンにとって定番のライブスポットです。観客との距離がわずか数メートルという親密な空間で繰り広げられるパフォーマンスは、まるで全員が参加する儀式のようです。音の細部からステージに至るまで、全て

がこの街の音楽文化と深く結びついています。旅行者にとって、これらの空間は単なる観光地ではなく、音楽とともにある南台湾の暮らしを体験し、街のリズムや自由なビートを感ずるための場所なのです。少しだけ歩みを緩めて耳を傾ければ、この小さな空間が街の文化を理解するための秘密の入口となるでしょう。

地域の垣根を超える都市型音楽 パーティー：民生電気

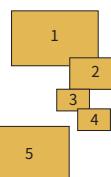
台南で誕生した音楽キュレーション・レーベル「民生電気」は、2007年から「音楽こそが日常生活（民生）」とする理念の下、台南や高雄など様々な場所で日常空間を舞台にした新しいスタイルのパーティーイベントを生み出してきました。中でも最も革新的な取り組みの一つが、サイレントディスクコの方式を活用することにより、市場や公園、寺院、建物の屋上などのユニークな場所をパーティー会場にしたことです。参加者はヘッドフォンを装着し、耳元で流れるDJの音楽を聴きながら、周囲に迷惑を掛けることなく、音楽の高揚感を楽しんだり踊ったりすることができます。都市における新しい共生の可能性を示した試みでもあります。

民生電気の企画するイベントは、多種多様なかつ実験的な内容に溢れています。例えば伝統的な市場での台湾語の懐メロパーティー、寺院での布袋戲（人形劇）とDJのコラボ、さらに屋上や没入型空間で環境音楽やエレクトロを流したりと、どれもがパーティーでありながら、公共性をそなえた交流の場ともなっています。今や音楽パフォーマンスはステージ上に留まらず、街のあらゆる場所がライブ会場になりえるのです。

民生電気は平凡な日常生活の場を、何時でも踊りだせるパーティー空間へと変えてきました。旅行者にとって、それはただのパフォーマンスではなく、現地の文化を体感する新しい方法でもあります。



¹ 2024 台南文学フェスティバルのシリーズイベントとして、民生電気は台湾文学史を一つのパーティー・プレイリストに凝縮。^{2&3} 都市空間の境界を果敢に越え、伝統市場で電子音楽パーティーを開催。^{4&5} 民生電気は、前衛的に台湾の伝統文化をアレンジ。



耳を使って旅をする——

B=UNS
TRACK

台北の音楽風景を歩く



音の旅ガイド

黄韻玲

(ホアン・ユンリン)

台湾の著名ミュージシャン、音楽プロデューサー、シンガーソングライター。金曲賞（中華圏のグラミー賞と呼ばれる）の最優秀賞編曲者賞やプロデューサー賞など数々の受賞歴があり、現在は台北流行音楽センター（略称「北流」）の理事長を務めている。長年にわたり台湾のポップミュージック文化の普及に尽力し、ポップスから映像、舞台芸術など幅広い分野で活躍中。豊かな音楽的才能と、ジャンルを超えたキュレーションの経験を兼ね備えている。

黄韻玲にとって音楽とは、耳で感じるだけではなく、その人の人生のバックボーンであり、世界を見るための方法でもあります。幼いころから家の中では年長者が

日本の昔の歌謡曲を好んで聴き、街角では華語のヒットソングが流れ、学校では英語の合唱を習うなど、多言語が飛び交う環境で育ちました。異なる文化、言語、ジャンルからなるこれらの音のかけらが、彼女の音楽に対する鋭い感受性を徐々に育んでいきました。「台湾人らしさは、こういうもの。そして台北は、こうした様々な声をまるごと包み込んでくれる街なのです。」微笑みながら彼女は話してくれました。

ミュージシャン、クリエイター、そしてプロデューサーとして、黄氏はこれまでに1000を超えるライブや制作に携わってきました。それゆえ彼女は、音楽の真の力はライブにこそ宿ること、皆と一緒に歌を聴き、口ずさみ、感動を共有するその場の瞬間に生まれるものだというのを、深く理解しているのです。こうした光景は今この瞬間にも、台北の街のあらゆる場所で見られ、広がっています。西区の街角のライブハウスや、赤レンガ古民家でのジャズナイト、さ

らには野外フェスで汗を光らせている若者たちの姿の中に。そのどれもが台湾のミュージックカルチャーのエネルギーと多様性を表現しています。

「台北は自由な街で、そこで育つ音楽もまた自由です。」黄氏はそう言った後、台北の音楽シーンが特定のジャンルに偏っておらず、ロックからエレクトロ、ジャズからラップ、フォークから実験音楽まで、多様なスタイルの音楽が響く舞台がそれぞれに存在する、と指摘しました。そしてこれらの場所は、異なる世代や文化を持つ人々が出会い、対話し、共鳴し合う場でもあります。

それでは台北を訪れる旅人は、どのように音楽を通じてこの街を知ればよいのでしょうか？黄韻玲のアドバイスはシンプルです。「北流から始めれば、まちがいありません！」

北流はどう楽しむ？耳を傾け、音楽という名の旅へ出発しよう

北流を初めて訪れる人におすすめなのは「文化館」です。常設展「唄おう 私たちの歌——流行音

楽物語展」では、19名の解説者を

招き、13の展示エリアに分かれ、113曲に上る楽曲を含む合計1400点の展示品が紹介されています。この展示は、1930年代から現在に至るまでの台湾ポップミュージックの歩みを網羅しており、日本統治時代の「歌仔本（民間演劇の台本）」からラジオや蓄音機、学生たちによるフォークソング時代のギターの音色、ロックやヒップホップの台頭、世代を超えたアーティスト同士の対話など、多様な側面から台湾音楽の文化を体感できるようになっています。展示内容は時間軸に沿って構成され、音声、映像、インタラクティブ装置、衣装、小道具などを組み合わせることで、台湾ポップミュージックが社会や文化と共にどのように変遷してきたのかを理解することができます。

「私たちは、海外からの旅行者が当館を訪れた際にも、台湾音楽の素晴らしさをしっかりと理解してもらえよう、多言語ガイドに力を注いでいます。」と、黄氏は語ります。文化館では、中・英・日・韓・広東・台湾の6言語による音声ガイドを提供しています。中でも中国語（華語）の音声ガイドは、マルチに活躍する女優シ

ルヴィア・チャン（張艾嘉）、歌手のジョナサン・リー（李宗盛）、メイデイ（五月天）のアシン（阿信）、レネ・リウ（劉若英）などが自らナレーションを担当しています。日本語ガイドは、日本でも歌手として活躍したビビアン・スー（徐若瑄）を起用し、日本から来た観光客が馴染みのある声で、台湾音楽の旅を楽しめるように配慮されています。

文化館に加え、パフォーミングスホール（表演庁）も一見の価値あるランドマークです。まるで山脈が連なっているかのような造形が目を引く建物は、音楽パフォーミングのために設計された中規模ホールで、屋内には数多くの専門的な設備が備えられており、クオリティの高い演出空間を提供しています。それには世界最高峰とされるフランス製「Acoustics 2」音響システムをはじめ、防音ドア、電動式可動ステージ、マザー

トラスが含まれ、これらをまとめて「北流四宝」とも呼ばれています。毎週多岐にわたるプログラムが開催されており、流行音楽はもちろんのこと、クラシックコンサートから創作音楽のステージまで、人々が自分の好みに合わせて多彩な音楽を生で楽しむことがで

きるようになっていきます。

昼間は文化館をじっくり見学し、夜はライブやパフォーミングを鑑賞する——そうやって一日の時間をたっぷり使うのが、黄氏の勧める楽しみ方です。旅の締めくくりには、センター内の特色あるレストラン「北流カフカ・酒等」で軽く一杯飲んだり、隣接する瓶蓋工廠文創園區を散策したりすれば、より充実した音楽の旅になることでしょう。「音楽とは、その街をよく知るための非常に有効な方法です。言語がわからなくても、耳を澄ませるだけで、台北を感じ、理解することができるのです。」と、彼女は強調します。

台北流行音楽中心

📍 台北市南港区市民大道八段99号

🕒 10:00-18:00、月曜定休

🚶 アクセス：MRT昆陽駅または南港駅から徒歩約15分。

TRACK

2

個性豊かな新と旧が混在する場所—— 台北西エリアの音楽シーン

台北、この都市の音は、古いレコード盤が奏でるザラザラとしたノイズにも、街角でスケボーが歩道を滑る音にも宿っており、またそのリズムは廟の前で演じられる賑やかな歌仔戲(台湾オペラ)の歌声にも、深夜のライブハウスに鳴り響くドラムのビートにも宿っています。ここは台北の西エリア。長い時間の痕跡が深く残り、今なお鼓動を刻み続ける、新旧が交差する場所です。

「秋波電台」のDJで、「秋波名曲珈琲」の経営者でもあるQQは、長年に渡りこのエリアの音の風景を見つめ、音楽を流しながら、街の、人の記憶を一つ一つ積み重ねてきました。QQの目に、西エリアの音楽スポットは、世代交代とスタイルの進化を反映するリゾネーター(共振器)のような存在として映っています。かつては大規模な音楽スペースもそれぞれ自主的に運営されているケースが主流であり、今では国内外の著名なミュージシャンを招いたイベントも増え、より広い層の

人々を惹きつけるようになっていきます。CDの最盛期、多くのショップはCDだけを取り扱っていましたが、今ではアナログレコード、カセットテープ、中古のヴィンテージレコードを専門に扱うインディーズ系の小さなショップも点在し、異なる時代の鮮やかなエネルギーを映し出しています。小規模な音楽スポットに関しては、ライブハウスやDJバー、音楽カフェなどで実験的な面白いサウンドが生まれており、それが街全体の音の風景を、より一層多彩で豊かなものにしていきます。

西エリアの魅力は、土地の歴史の深層から醸し出されているものですが、それと同時に、新しいものへの寛容さも併せ持っています。「ここでの新旧の融合は、人と人との互いに思い合う関係に似ています」と、QQは言います。上の世代が遺してくれた空間や物語が、現代の新しい感性と結びつき、継承されていく、それが西エリアを、台北で最も生活感あふれる音楽の街として変貌させているのです。例えば、趣きある昔ながらの廟の前を通り過ぎた先に、スタイリッシュなカフェ「小島裡」があったり、「望春風」の作詞家・李臨秋の旧居の向かいに、コーヒーとスケボー、ストリートカルチャーを融合させたセレクトショップ「STABLE」があったりと、新旧の混在する世界が何気ない日常に広がっています。

QQおすすめの散策コース、まず屋間に大稻埕の「慈聖宮」の周りで台湾らしさをぎゅっと詰め込んだ汁バー(米粉湯)を食べ、「秋波名曲珈琲」に寄ってクリームソーダを注文し、日台飲食文化の交わった雰囲気味わい、その後歩いて「小島裡」まで行き、コーヒーを飲みながら、カセットテープから流れる囁くような音楽に耳を傾ける、という音楽満喫ルートです。夕方頃には中山駅周辺へと足を伸ばし、元バンドマンのオーナーが手がけるセレクトショップ「P&R STORE」や「Waiting Room」をふらっと覗いて見てもいいですし、夜になれば「P&R

Pleasure」でレコードを聴いたり、圓山の「23 Music Room」で多様なスタイルのDJパーティーに参加するのもおすすめです。臨場感あふれるライブを味わいたいなら、「Revolver」という、夜更かし好きには外せない、隠れ家的な音楽秘密基地もあります。

QQはまたシェアサイクルのYouBikeに乗り、音楽を聴きながらのんびりと市民大道を走る「音とともに移動する」台北の楽しみ方も紹介してくれました。イヤホンから流れるのは、李英宏の「台北直直撞」。視界に映るのは車が波打つように通り過ぎていく高架橋、路地裏の小さな店、歩行者たちの豊かな表情。この曲は、単なる街のBGMではなく、西区の日常のリズムを紐解いてくれるものです。この歴史の層を積み重ねた市街地から聴こえてくる音は、日常のひとコマとして絶えず再生され、再構成されながら受け入れられています。あなたも台北を訪れたら、ぜひその耳と心でこの街の魂を感じてみてください。

音の旅ガイド

QQ

「秋波名曲珈琲」のオーナーで、DJでもあり、また親友のJimmyと共にオンライン音楽番組「秋波電台」を運営している。昭和歌謡からジャズまでレトロな選曲を得意とし、音楽で昔の街の風景を現代とつなぎ合わせ、台湾独特の感性と都市のリズムを表現している。



大稻埕

街角で耳にする旋律

台北のミュージックカフェ文化は、1970年代のフォークソングとアナログレコードの全盛期に始まります。当時「フォークソングレストラン（民歌餐厅）」が、クリエイターや音楽ファンの集う場所として流行しました。その後、音楽メディアがカセットテープ、CD、ストリーミング、レトロなレコードへの回帰などに変遷するにつれて、ミュージックカフェの姿も徐々に変化してきました。

そして現在の台北西区は、かつてレコード店が軒を連ねていた時代とは異なる、「聴く」文化の新たな風景を育んでいます。これらの街角や路地裏において、音楽は単なるBGMではなく、丁寧にセレクトされた、日常の感情やリズムを演出するための大切な要素として機能しています。例えば古民家をリノベーションしたカフェで、1970年代の台湾語のメロディーが流れていることもあれば、午後の陽射しの中で「Lo-fi」やロートーンの電子音に包まれることもあるでしょう。それぞれの店が選曲に対するこだわりの哲学を持っており、ジャズ、インディー・ロック、台湾生まれの楽曲が交錯し合っており、この街に立体的で個性ある音を響かせています。



小島裡 (SIDOLI RADIO)

レトロな街に響くカセットテープの記憶

大稻埕の旧市街にあり、コーヒー、レコーディングスタジオ、カセットテープ体験、展示、セレクトショップが結合された空間。80～90年代に台湾で発売されたカセットテープが100本以上所蔵され、その場での再生やレンタルができる。定期的に公開レコーディングやテーマに沿った展示イベントもおこなわれており、旅行者は一杯のコーヒーを味わいながら、歴史と暮らしが織りなす音の記憶に静かに耳を傾けることができる。

📍 台北市大同区長安西路245号1階

info

🕒 水曜～日曜 10:00-18:00、月曜・火曜定休、金・土曜は24:00まで夜間バー営業



秋波名曲珈琲

音楽喫茶で過ごす懐かしい午後の時間

MRT 大橋頭駅にほど近い、昭和レトロの雰囲気 が濃密に漂う店。アナログレコードで流れる昭和の名曲や、Lo-fi サウンドが心地よく響き、ハンドドリップ・コーヒーやカラメルプリン、メロンソーダといった昭和純喫茶風デザートも楽しめる。どこか懐かしく、温もりに満ちた店内で、ノスタルジックな時間に浸りながら、午後のひとときを過ごすことができる。

📍 台北市大同区昌吉街218号

info

🕒 月曜～金曜 13:30-18:00、土曜・日曜定休

古亭・公館

地下で育まれた音の風景

台北のライブハウス文化は、まさに地下で育まれた音の記憶と言えるでしょう。90年代末、ポップスがまだ音楽市場のメインストリームだった時代、一部のクリエイターやファンたちは、地下室や古びた工場、学校のサークルの練習室といった場所です、自分たちだけの音楽という言語を模索し始めました。こうした空間は、ロックからフォーク、エレクトロ、ジャズ、実験音楽への変遷を見守り、台湾インディーズ音楽の誕生の場所となりました。同時に、台北の街がどのように音楽を通して暮らした時代、感情を反映してきたかを物語る証人でもあるのです。

2000年代に突入すると、「ライブハウス」という用語が市民権を得て、従来のミュージックバーに取って代わり、インディーズバンドやクリエイターが集まるパフォーマンスの中心地となりました。台北の西エリアは現在、こうした小規模なライブ空間が、路地裏にひっそりと佇む店、元工場をリノベした空間、文創園區（文化や創意をテーマにした複合施設）の中に併設されるなどの形で点在しています。共通しているのは、観客とミュージシャンの距離がとて近く、

一体感のあるライブが体験できる、という点です。毎週のように開催されるライブでは、ロック、ヒップホップ、フォーク、ジャズ、実験音楽など多様なジャンルが楽しめ、リアルなライブ体験を求める若者たちを惹きつけています。このように、異なる言語、文化、感情が独自にミックスされた音楽文化が形成されたこの街では、今この瞬間も都市のリズムと生命力をより直感的に感じることができるとのことです。

The Wall Live House

熱気あふれる、若者のライブ聖地

台北市公館エリアを代表するライブハウスで、台湾のインディーズ音楽の重要な拠点の一つでもある。地下のスペースは約600人を収容でき、ロック、ポストパンク、実験音楽などジャンルにとらわれない多彩な音楽をカヴァーしている。「ADC 年鑑」により都市のカルチャーアイコンと評され、台北のアングラミュージックのエネルギーを体感するのに外せない場所となっている。

info

- 📍 台北市文山区羅斯福路四段200号B1
- 🕒 スケジュール等は公式SNS参照



聲色 Sounds Good

1 万枚のレコードに囲まれたカフェ

台北市大安区にあるレコード・ミュージック・カフェ。2021年のオープン以来、「時をかけるレコーディングスタジオ」をテーマに営業を続けている。1階には壁一面のレコードとヴィンテージの高級蓄音機が置かれ、地下1階にはレコーディングスタジオと視聴スペースも備えられている。平日は、厳選されたレコードを流し、週末は不定期でテーマに沿った展示やリスニングパーティー、ポッドキャストの公開収録なども開催されている。



📍 台北市大安区新生南路二段30巷1-3号
🕒 火曜～日曜 10:00-18:00、月曜定休

info

台北藍調 Blue Note Taipei

夜に響く、正統派ジャズバー

1974年創業、まもなく50周年を迎える台湾で最も歴史あるジャズバー。毎週伝統的なジャズやブルースから、現代的なフュージョンまで、幅広くカバーしたライブが開催されている。深夜にアットホームなムードの中で、ジャズを聴きながら友人との対話を楽しめる理想的な社交場となっている。



📍 台北市大安区羅斯福路三段171号4F
🕒 毎日の公演時間は異なり、火曜日はライブはなし

info

Legacy Taipei

酒造工場から生まれ変わったライブ空間

華山1914文創園區にある Legacy Taipei は、台北のポピュラーミュージックにおいて重要なライブハウスの一つだ。約225坪の床面積と、天井までの高さが8mという開放的な空間で、ロック、ポップス、ジャズ、エレクトロなど様々なスタイルのパフォーマンスに柔軟に対応できる設計となっている。



📍 台北市中正区八德路一段1号 (5A館)
🕒 スケジュール等は公式SNS参照

info

女巫店 (Witch House)

個性派ライブハウスの原点

カフェ、ボードゲーム、アンブラグド・ライブハウスが融合された空間で、日中はコーヒーや食事を提供し、木～土曜日の夜には、アーティストにライブ用ステージを開放している。1996年のオープン以来、陳綺貞 (チアー・チェン) や張懸といった著名なシンガー達がここから巣立った。台北で最も個性とエネルギーにあふれた、小規模ながら存在感を持つ音楽スポットの一つ。



📍 台北市大安区新生南路三段56巷7号1階
🕒 水曜～日曜 11:00～22:00、月・火曜定休、木曜～土曜は公演により23:30以降まで延長

info

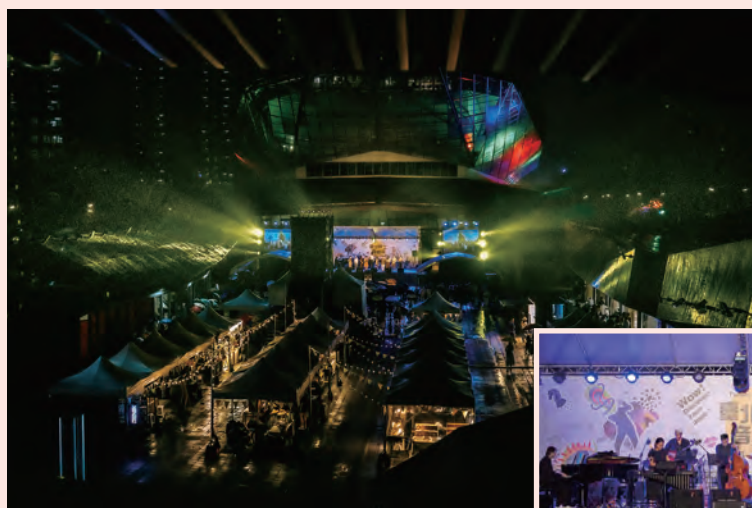
★ 秋の台北で絶対に外せない音楽フェス

台北の音楽フェス文化は、自由で実験的。ステージと観客席という枠にとらわれず、1990年代の草原で開催されたバーティーや海洋フェスから始まり、徐々に街の公共空間へと広がっていきました。音楽フェスは、もはやロックの象徴だけでなく、街、ライフスタイル、美字を融合させた都市型カルチャーへと進化しています。

2007年から開催されている「台北ジャズフェスティバル」は、その代表例です。大安森林公園の屋外大規模ステージでの演奏を中心に、路地裏でのライブやトークイベントなども併せて行われ、街全体をジャズのリズムで繋ぎます。今年10月に開催される「秋OUT音楽祭」は、初めて台北公館の河川敷、マルシェ、ライブハウス「DOME Live Music」をまたいだエリアで開催され、インディーズバンド、ラップ、

マダマ、Dcなど多彩なジャンルが集結、6つのステージで台北南エリアの最も「3」な音楽シーンを描き出しました。

また、ヒップホップ、インディーズロック、エレクトロ、台湾原住民族音楽まで幅広くカバーしながら、地域との繋がりも大切にしているのが特徴です。こうした音楽フェスに参加することは、まさに台北という都市を深く体験することにはかならず、芝生に腰を下ろして音楽を聴いたり、ミュージシャンと会話したり、ふらりと即興演奏の路地裏のステージに足を運んだりして、台北という都市がいかに音を巧みに使って街の姿を描き出しているかを直接感じることができます。



台北爵士音樂節 Taipei Jazz Festival

都市で繰り広げられる即興ジャズの祭典

毎年10月、大安森林公園、河岸留言西門紅樓、Blue Note など複数の会場で開催される。無料で一般開放され、今年（2025年）は10月22日に大安森林公園で屋外メインステージが設置される他、各地のライブハウスでもコラボイベントが展開される予定。海外及び台湾のアーティストたちが共演し、即興、フリースタイル、そして都市の共鳴を体感できるフェスとして、多くの人々に愛されている。

📍 台北流行音楽センターの屋外ステージ、台北市のライブハウス、ジャズクラブ、アートスペースなどの会場
📅 9月3日（水）～9月28日（日） 📱 [taipei_jazz_festival](#)

info



秋 OUT 音楽節 ChillOut Festival

のんびり過ごす秋の音楽フェスティバル

2018年にスタートし、毎年9月下旬～10月上旬にかけて台北公館エリアで開催されている音楽フェス。会場は自来水園区、公館水岸広場、PIPE Live Musicなどにまたがり、ヒップホップ、ジャズ、エレクトロ、R&Bなどの多彩なライブが展開される。「寝転びながら音楽を楽しむ」気取らずリラックスした空気感を醸し、台北の秋を代表する心地よい音楽の祭典となっている。

📍 台北市中正区思源街と汀州路の交差点付近、
自来水園区、公館水岸広場、PIPE Live Music
📅 10月11日（土）～10月12日（日）

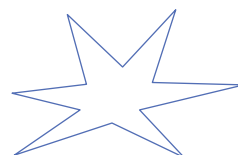
Info

TRACK
3

屏東
恆春



半島世界歌謡祭 × × ×



南島の歌声の記憶



落山風が吹きわたる時、島の南からの歌声が静かに響き始める。台湾最南端に位置する恆春（こうしゅん）半島は、美しい海岸線と歴史ある古城で知られているほか、「恆春古調」と呼ばれる民謡の故郷としても名を馳せています。この地で歌われる曲は、田畑や漁港、そして人々の普通の暮らしから生まれたもので、草が風に吹かれてそよぐ音や古今の人々の想いを静かに語りかけてきます。2018年に「半島歌謡祭」から「半島世界歌謡祭（Egale）」へリニューアルされて以来、このフェスは音楽を媒介として、土地の記憶と世界との対話を繋ぐ架け橋となってきました。

今年の「2025半島世界歌謡祭」は、10月15日～19日に恆春鎮（こうしゅんちん）で開催され、「民謡&ロック」をメインテーマに軽快なロックのリズムで伝統的な民謡のイメージを覆すものです。世界各地からミュージシャンが集い、まるで台湾の豪華な宴会料理「辦桌（バンドー）」を囲むような、異文化音楽の交流の場としても注目されています。今年のメインビジュアルは、「月琴の辦桌」をモチーフにしたもので、音の宴会料理をみんなで楽しもうというメッセージが込められています。

開幕パフォーマンス「食飯皇帝大

く灶餃炒詩郎（食は命の源くキッチン）のボエマー」では、月琴と乱れ太鼓によるリズムが交錯する熱気あふれるパフォーマンスで、祭の幕が開きます。メインイベント「半島來辦桌」では、恆春の伝統月琴奏者、日本の津軽三味線奏者・只野徳子およびエレクトロと伝統楽器を融合させた「Music」により、三者三様の音が一堂に会します。それぞれの奏でる音が、異なる文化と時代の中で新たな火花を散らし、民謡の枠を超えた音楽空間を創出します。

恆春にとって民謡とは、土地の奏でる声であり、人々の物語そのものです。歌謡祭では、この古き街から最も柔らかくかつ強靱な声を届けるため、ベテランの歌い手たちを招き、地元グループによるユニークなパフォーマンス「料理民謡」も開催。「食べる」ことを「歌う」ことへと転換させ、観客が味覚を通じて音と文化に繋がる、そんな体験をお届けします。また、大勢でごちそうを囲む台湾の「辦桌」のコンセプトの下、イタリア、アメリカ、マレーシア、フランスなどから音楽家が集結し、世界各地の弦楽器を奏で、多様性に富み、現代的で、エネルギーに満ちたパフォーマンスを披露します。

恆春を訪れる旅行者にとって、歌謡祭の開催期間はこの街の風土と文

化に深く触れる絶好のチャンスです。日中は地元グループの「民謡小旅行」に参加して、一緒に老街や古跡を巡ったり地方創生のスポットを散策し、夜には夕日と星空の下、広場で様々な文学的音楽に耳を傾けることができます。歩き疲れたら、「Rocky 落山風」マルシェを覗いてみるのもおすすめです。月琴や海風、民謡からインスピレーションを受けた地元のオリジナル雑貨、工芸品、お菓子などが並び、自分のお気に入りのものを見つけたのも楽しいですよ。

恆春では、民謡・古謡も博物館の中の標本ではなく、街角や市場など今の暮らしの中に息づいているものです。半島世界歌謡祭に一歩足を踏み入れると、古い調べがロックのビートに変わり、歌声が料理のスパイスとなり、音が人と人とを結びつけてくれることに気が付くでしょう。島の南の端にあるこの小さな街で、ゆったりとしたリズムと優しい音色に包まれながら、もう一つの台湾の声を感じてみてはいかがでしょうか？



2025半島世界歌謡祭

📍 恆春西門広場 📅 10月15日(水)～10月19日(日)

アクセス：1. 高铁(新幹線)をご利用の場合：左営高铁駅から9189墾丁快線(エクスプレス)に乗りし、恆春轉運站(恆春バスターミナル)で下車。中正路を徒歩で10分ほど進むと西門広場に到着。2. 火車(台湾鉄道)をご利用の場合：枋寮駅から9117、9188、9189番のいずれかのバスに乗りし、恆春轉運站(恆春バスターミナル)で下車。中正路を徒歩で10分ほど進むと西門広場に到着。

info

わい
わい

賑わう市場で、
甘く香ばしい緑豆蒜に舌鼓



恆春の老街（歴史ある商店街）を歩くと、売り子の呼び込みや道ゆく人々の会話が飛び交う中で、どこからか甘くこぼしい香りが漂ってきます。その正体は、この地域で夏に欠かせない伝統スイーツ「緑豆蒜」です。脱穀された緑豆に黒糖と乾燥させた龍眼（リュウガン）を加え、じっくりと煮込んで香り高い濃厚なスープに仕上げたスイーツです。昔は温めた状態で食べられていましたが、今ではかき氷を加えるなど、冷やして提供される場合が多いです。市場の片隅に並べられた小さなスツールに腰かけ、風を浴びながら緑豆蒜を味わい、旅行者や地元の人々が行き交う情景を眺めていると、多くの解説を聞かずとも、この小さな街の温かみと生活の息吹が感じられるでしょう。

柯記古早味緑豆饅頭

● 屏東県恆春鎮福德路69号
● 09:00-16:00、売り切れ次第終了

Info

ぽろぽろ

恆春民謡館で
恆春小調を聴こう



東門古城のそばにある恆春民謡館をぶらりと訪れて、方言で歌われる小唄を聴いてみませんか？台湾最南端にある、この文化・芸術の新たなランドマークでは、館内に音の博物館、民謡展示エリア、伝承のための教室が設けられ、地元の先生たちが時折、この土地の細々とした暮らしの情景や歴史の記憶が込められた小唄を口ずさみ、私たちに聴かせてくれます。この空間の全てが、この小さな街の歌の歴史を語りかけてくれています。その世界に身を預ければ、恆春民謡がいかにして、この半島で最も柔らかに真摯な歌の記憶を紡いできたかを実感することができます。

恆春文化中心民謡館

● 屏東県恆春鎮東門路1巷6号
● 09:00-18:00、金曜・土曜 09:00~21:00、月曜休館

Info

サラサラ

サラサラ

風と鳥の囀りに耳を傾け、
城壁で落日の夕陽を眺める



恆春古城の城壁は、台湾で唯一、清朝時代の東西南北の城門および城壁がほぼ完全な形で残っている文化遺産です。城壁の一部では上に登って歩くことができ、そこから街を見下ろせば、まるで自分が街全体を独り占めしているかのようにも感じられる特別な景色が広がります。夕暮れ時風が城門をそっと吹き抜け、城壁の外から聞こえてくる鳥のさえずりが、空を真っ赤に染める夕焼けと重なり合うさまは、まるで一編の美しい詩が立体的な風景となって目の前に現れたかのようです。赤レンガ造りの城壁の上では、一歩足をを進めるたびに風景が移り変わり、そよ風や光の陰影の変化も合わさって、長年にわたる人々の営みと自然が交差しつつ共存している姿を肌で感じることができます。

恆春古城

📍 恆春鎮北門、東門、西門、南門
🕒 終日開放

info

ズよズよ

海風と陽光の下、
ダイニングバーで楽しむひととき



恆春鎮南湾エリアの海辺にある「迷路小章魚餐酒館 Piccolo Polpo Bistro」は、世界を旅してきたシェフが故郷に戻って作り上げた、民宿もそなえたダイニングバーです。陽光に照らされたテーブルで、波が岩に打ち寄せる音や潮の満ち引きに耳を傾けながら、地元産の新鮮なタコや貝類などを使ったイタリア風シーフード料理を味わうことができます。舞台も照明も演出もありませんが、自然の音や風景が、素朴なBGMとなって寄り添ってくれる場所です。海に面するガラス張りのオープンキッチンの隣に設けられたテラス席に座ると、目の前に広がる澄んだ青い海を一望できるようになっています。恆春で最も魅力的な、午後の一楽章を堪能できるスポットです。

迷路小章魚餐酒館 Piccolo Polpo Bistro (恆春店)

📍 屏東県恆春鎮南湾路60号
🕒 月曜～木曜 12:00-14:15、18:00-20:00、火・水曜定休
金曜～日曜 12:00-14:15、18:00-20:30

info

鉄道と客家の交差点

鉄道の記憶から

客家の山への文化散歩



園内には多くの貴重な歴史的遺物が残されています。

撮影：鄭傑中

苗栗旧山線に足を踏み入れると、鉄道の歴史と客家文化が交錯する、静かでスローな旅が始まります。スタート地点は「苗栗火車頭園區」（苗栗機関車パーク）。ここでは石炭をくべたり、転車台に乗ったりと、蒸気機関車の黄金時代をふくむ台湾鉄道史のぬくもりを、肌で感じることができます。

沿線には勝興駅、龍騰断桥、線路跡を歩ける七彩トンネル（功維敘トンネル）など、見逃せない名所が点在しています。

電車で南下し三義駅に着くと、客家の集落が旅人を迎えます。古い街並みには、木彫りや藍染めなどの伝統技術が息づいており、擂茶づくりを体験したり、塩漬け豚肉や菜包（客家風野菜餅）を味わったりして客家文化のテイストを楽しむことができます。山林にひっそり佇む新スポット「樸・莊園美術館」では、大自然に溶け込んだ現代アートが旅に詩的な彩りを添えてくれます。旧山線の旅は単なる電車の旅を超えた、陽光、カルチャー、美意識と語り合うひとときです。



撮影：鄭傑中

苗栗火車頭園區：歴史と暮らしをつなぐ、生きた鉄道博物館

旅が時間との対話だとすれば、苗栗火車頭園區は台湾近代の記憶へ通じる窓口です。ここは鉄道ファンの聖地であるだけでなく、鉄道史と人文景観が融合した文化スポットでもあります。

苗栗市の中心部に位置し、苗栗駅西口に隣接した5700坪の敷地を有するこの園區は、旧・苗栗鉄道文物展示館を前身とし、2025年にリニューアルオープンしました。長年の整備と再構築を経て、より多彩で開かれた空間としてよみがえっています。鉄道文化と客家建築の要素、さらに親子で楽しめる遊び場などが融合された、世代を問わず楽しめる観光地となっています。

苗栗は清朝統治時代以来、山間交通の要所であり、日本統治時代には旧山線の建設と運行により、北部と中部を結ぶ交通の中心地としての役割を担いました。1908年に開通した旧山線は、苗栗・三義・后里を蛇行しながら結びつけるもので、日本人技師たちは、険しい地形を越えるため多くの鉄橋とトンネルを設計しまし

た。中でも功維敘隧道と内社川橋は往時の姿を今に残し、百年前の技術と自然の調和を物語る証人となっています。

園内で最も代表的な展示物は、1936年に大阪汽車製造株式会社で作られたCT152蒸気機関車です。この機関車はかつて石炭輸送や長距離列車として活躍し、台湾が蒸気機関車時代からディーゼル、さらに電化へと進む変遷の歴史を見守ってきました。今は静かに展示台に佇んでおり、まるでこの島の交通と経済の歴史を語り伝える老賢者のようです。

「転車台ホール」では、今も稼働可能な回転式転車台が設置されており、毎日決まった時間に稼働実演が行われます。訪れた人は機関車の向きを変える動作を間近に見学でき、力強くも優雅な回転の動きは、まるで時間の歯車が再び動き出したかのようです。また「列車展示館」では、日本統治時代から戦後にかけて活躍したさまざまな機関車・客車が展示されています。台湾鉄道のシンボルであるオレンジ色の車両をはじめ木造

客車、珍しい65トン級蒸気クレールン車などが並んでいます。切符穴あけ機や信号器、昔の運転士の制服といった細部からも、大きな歴史の流れを垣間見ることができ

ます。園内奥の親子体験エリアでは、子どもたちが石炭投入や車両組み立てを体験でき、遊びを通して複雑な技術を学べる工夫が凝らされています。「猫ふれあい館」や「にゃんにゃんカフェ」も注目に値します。癒やしの猫たちと創意あふれるデザインが調和し、単なる展示空間を越えた、休憩や交流ができる空間となっています。コーヒーマシンの香りや猫のくつろいだ姿が、旅にユーモアを添えてくれます。

日本からの旅行者にも配慮され、園區の多くの展示には中英・日3言語の解説が用意されています。スタッフの対応も丁寧で、海外の旅行者も安心です。近代鉄道史に関心がある方や、台湾の地域文化と暮らしの交錯を体験したい方にとって、技術、歴史、感性が一体となったこの園區は外せない旅のスポットと言えるでしょう。

苗栗火車頭園區を訪れば、生きた博物館の中に身を置く感覚が味わえます。鉄道のレール、蒸気の余韻、転車台の旋律、猫の喉を鳴らす声、それらが静かにこの山里の旋律を奏でています。ここは歴史の終点ではなく、未来との対話が始まる場所なのです。

SPOT
|

苗栗火車頭園區（苗栗機関車パーク）

旧・苗栗鉄道文物展示館を改装し、2025年に鉄道文化と客家特色を融合した新しい形のパークとしてリニューアルオープン。蒸気機関車、木造客車、珍しい大型クレーン車など10台以上の列車が展示され、転車台の実演や石炭投入口の体験、小型列車の乗車体験が可能。猫とふれあえるカフェや大型猫アートの展示もあり、親子連れにも、SNS映えを狙う旅行者にも人気のスポット。

- ① 苗栗県苗栗市英才路130号（苗栗駅西口より徒歩約2分）
- ② 09:00-17:30
- ③ 入園料NTD.100（園内消費に充当可）



鉄道沿いを歩きながら、 山林と客家文化が織りなす風景に身を委ねる

苗栗旧山線はかつて蒸気機関車が走っていた歴史ある鉄道で、今では山間に延びる文化回廊として、鉄道の記憶と客家文化をつなぐ役割を果たしています。日本から訪れる旅行者にとって、ここは台湾西部にひっそりと残る静かな路線であり、過去への窓を開く旅の入り口でもあります。

苗栗市内でひと息つきたいなら、一杯のコーヒーがちょうど良いでしょう。市街地の静かな路地にある「沛克咖啡店 Pergam Coffee Roasters」は、自家焙煎とミニマルな空間美学で知られています。店主の豆セレクトとハンドドリップの腕前により、一杯ごとに味覚の小旅行を思わせるひとときが過ごせます。

バスや車で「功維敘トンネル」へ向かうと、大きな曲線を描く赤レンガのトンネルが現れます。1903年に建設されたこのトンネルは、当時台中と苗栗を結ぶ交通の要所でした。今では列車の姿はなく、代わりにのんびりと歩く人々の姿が見られます。

旧山線沿いにある「内社川橋」は、谷間に架かる鉄と大地の対話の証というべき建造物です。かつては列車が橋の上を走っていましたが、現在は遊歩道として



日本統治時代に建造された赤レンガのアーチ型鉄道トンネル。旧山線の重要な歴史遺構で、徒歩とサイクリング用のトンネルとしてリノベーションされている。内部には照明と光の演出が施され、ノスタルジーとテクノロジーが融合した空間となっている。

📍 苗栗市三湖道76-5号
🕒 終日開放

入場無料。光と影を楽しむには日中の訪問がおすすめ。

SPORT

2

功維敘トンネル

苗栗市の静かな路地に佇む個人経営カフェ。自家焙煎と丁寧なハンドドリップを軸に、シングルオリジン、エスプレッソなど多様なコーヒーを提供している。店内はシンプルな工業風デザインで統一されており、静かで落ち着いた空間がコーヒー愛好者や旅人の休息の場となっている。スイーツや軽食も好評で、苗栗文化散歩の途中に立ち寄るのにぴったり。

📍 苗栗市中山路108号
🕒 11:00-18:30

店内利用・テイクアウト可。席数に限りがあるため平日訪問がおすすめ。

SPORT

1

沛克咖啡店（ペイク珈琲店）
Pergam Coffee Roasters

整備され、旅人が川のせせらぎや山々の風景を眺めながら散策できます。あたかも今にも往年の機関車が、山林の中から姿を表してくるかのようにも思えます。

苗栗・銅鑼丘陵の上に位置する「台湾客家文化館」は、台湾で初めての客家文化をテーマにした大規模な展示館です。自然の地形を活かした建築設計は静けさとリズムを感じさせ、常設展示では言語、建築、祭事、工芸、食文化など客家の多様な側面が紹介されています。マルチメディアやインタラクティブな展示を通じて、訪問者は客家民族の暮らしの知恵と歴史をより深く理解することができます。

旅の終盤には、山林の奥にある「樸・莊園美術館」へ。建築家の夫妻が2000年代から20年の歳月をかけて創り上げたこの場所は、自然と工芸が融合した美術庭園です。古材や窯焼きレンガ、石材といった歴史的な素材を活かし、自然の景観と融合させることで、半屋内型ジャングル空間や水辺、山の風景が調和しています。館内では繊細な味つけのコース料理や茶席体験が提供され、展覧会や芸術サロンも定期的に開催されており、料理の饗宴であると同時に、感覚を研ぎ澄まされる空間でもあります。

苗栗旧山線の旅は、単なる移動ではなく、時間と文化、風景と人々の交差点を歩んでいく深い体験です。列車の音が消えた今でも、村落や遺構には、かつての時代の足音が静かに響いています。

Google Map!



山林の中に佇む現代アート空間。「自然 × アート」をテーマに、国内外アーティストの作品を展示している。建築、景観、光と影が溶け合い、静かな内省と感性の探求を可能にするスポットだ。

● 苗栗縣三義鄉雙潭村雙連潭51-3号
● 火曜～土曜 | 10:00-17:00
日曜、月曜休館 (全預約制)

入館料200元。ガイドサービスあり。
カフェ・軽食コーナー併設。

SPOT

5

樸・莊園美術館

台湾初の客家文化をテーマにしたクオリティの高い博物館。展示内容は客家の歴史、言語、食文化、工芸などを含み、インタラクティブ展示を通して客家民族の生活の知恵や文化背景を深く理解できる。

● 苗栗縣銅鑼鄉九湖村銅料南路6号
● 09:00-17:00、火曜休館

入館無料。ガイドサービス (定刻実施)、親子向けエリアあり。

SPOT

4

台湾客家文化館

内社川に架かる旧鉄橋で、旧山線を代表する構造物のひとつ。現在は歩道として整備され、歴史ある鉄道と大自然の景観を同時に楽しめる。

● 苗栗縣三義鄉 (勝興駅付近)
● 終日開放

無料開放。歩きやすい靴での訪問をおすすめ。

SPOT

3

台湾鉄路旧山線・内社川橋

台湾麺料理の旅

百通りのおいしさを：

台湾の麺料理の多種多様ぶりは論をまたない。早朝、街角の屋台でいくつかの滴味小菜（醤油ベースで煮込んだおかず）を注文し、あっさりした具なしの陽春麺といっしょに食べれば、十分に腹が満たされる。または麻醬涼麵（ごまだれ冷やし中華）と、玉子・肉団子・豆腐の入った台湾式味噌汁を持ち帰って家で食べるのも良い。油麵（かん水入りの麵）とニンニク風味のごまだれの組み合わせはさっぱりとして思わず箸が進み、猛暑で食欲が湧かないときには救いの一品である。麵は、いつもの食卓に溶け込んだ存在であると同時に、主食として主張しすぎず何にでも合う柔軟性を兼ね備え、複雑な風味や西洋料理の技と組み合わせることで、より奥深い料理にも変身する。

牛肉麵、傻瓜乾麵（福州まぜそば）、肉燥乾麵（肉そぼろまぜそば）、魷魚羹麵（イカ入りとろみ麵）、枚挙にいとまがないほどバラエティに富んだ台湾の麺料理は、どれもがこの大地の記憶を呼び覚ます力を持つ。今回は、屏東を起点に、味覚の足跡をたどって北上しながら、三軒の代表的な麺料理の店を訪ね、この島が一杯の麵によってどのように自らの食風景を描いているのかを探ってみる。



屏東県屏東市協和東路99号 11:00-18:30、火曜・水曜定休

屏東市内に位置する美菊麺店は、控えめながらユニークな外観だ。落ち着いた色調から、オレンジとグリーンの鮮やかなアクセントを効かせた外観に変わり、一目で印象に残る。リノベーションで古い住宅を明るく生まれ変わらせ、台湾伝統の乾麺（汁なし麺）を提供する麺店とは思えないほどスタイリッシュだ。

ここでは、一杯の乾麺を煮込み料理の小皿とを併せていただくのがオーソドックスな食べ方だ。麺の上に肉そぼろが載せられたシンプルなもの、混ぜると麺に油が回り、つやつやとした光沢を帯びる。コシのある麺が醤油ベースの香ばしいソースをしっかりと絡めとる。そこにキュウリ、豚の血をもち米で固めた米血、煮卵、昆布などの小皿を添えれば、さっぱりした味わいと塩気が交互にやってきて、シンプルながら奥行きのある味わいに満たされる。

屏東

美菊麺店

素朴な美学の一杯



嘉義市東区興中街6号 09:00-18:00、月曜・火曜定休

嘉義涼麺の決定打は、麺の上に添えられる「白酢」にある。涼麺に台湾式味噌汁を合わせるの、台湾人にとって夏の定番の味覚である。涼麺（冷やし麺）のタレは、南北を問わずごまだれとおろしニンニクに、醤油や酢を加えて味が整えられるのが基本だが、嘉義ではそこに「白酢」と呼ばれるマヨネーズが加わる。

食べる前に、タレをよくかき混ぜるのがポイントである。とろとした白いマヨネーズがごまダレとしっかり混ざり、麺全体をしっかりと包み込む。口に入れた瞬間、まずごまの香ばしさが広がり、そしてほんのり甘いマヨネーズの風味が追いかけてくることで、ごまダレの濃厚さが和らぎ、まろやかで繊細な味わいになる。飽きのこない奥行きのある味わいだ。

嘉義

黄記涼麺涼圓

ご当地限定！涼麺界の偉大な発明・白酢マヨネーズ



台南市中西区青年路90号1階 12:00-14:00、17:50~20:00、火曜・水曜定休

最後は台南である。古都と呼ばれるこの街は、庶民の小吃文化を今日まで継承しているだけでなく、台湾麺料理におけるイノベーションの場ともなっている。中西区の青年路にある「麦謎食驗室 Bue mi.Lab」は、店名が台湾語の「麺を売る」（ペーミー）の音にかけられている。

ここのシェフたちは、さまざまな国や地域の食材を掛け合わせることが得意で、思いがけない味をぶつけ合うことで、驚くような麺料理を生み出している。台湾人になじみのある剥き唐辛子、東南アジアのサンバルソースやサテなども取り入れ、一品ごとに大胆な組み合わせが新鮮な驚きをもたらしてくれる。たとえば「學甲無毒蝦佐參巴醬及剥皮辣椒（學甲産エビのサンバルソース和え剥き青トウガラシ添え）」にまぜそばを合わせると、その味わいは濃厚で躍動感にあふれ、塩気と辛味が混ざり合い、舌に強烈な印象を残す。

台南

麦謎食驗室 Bue mi.Lab

創作麺料理の無限なる可能性

(A) R
H

陶
器
と

新北市

鶯歌

交
流
す
る
旅

ア
ー
ト
が

d
O
T
(T)ER Y

2025年、新北市立美術館が正式に開館し、北台湾における現代アートの新たなランドマークとなりました。「開かれた空間」「透過性」「自然との親和性」を理念として設計されたこの美術館は、国際的な視野を取り入れながらも、日常生活の中に芸術を溶け込ませ、鶯歌（インゴ）の街に新たなエネルギーを吹き込んでいます。現代アートのムーブメントと、地域に根ざした陶芸の深い歴史が交差し、焼き物の町として知られるこの小さな街は、伝統と革新を融合させた独自の姿を見せています。

鶯歌といえば、「焼き物」は欠かせないキーワードです。19世紀初頭、移民たちが陶器づくりに適した粘土をこの地で発見し、窯を築いて創業したことが鶯歌陶業の始まりとされています。1940年代に入ると、より土地の特色を生かした陶磁器産業が広がり、大漢溪の水運や縦貫鉄道の開通にも後押しされて、鶯歌は急速に発展しました。最盛期には千軒を超える窯元が林立し、町中に高い煙突がそびえていました。陶器を焼く際に立ち上る濃い煙により、「黒い

町」とも呼ばれていましたが、やがてガス窯への移行によって徐々に改善されました。現在も老街（歴史ある商店街）では、かつての職人たちが使用していた「磚仔窯（レンガ窯）」を見ることができ、鶯歌の焼き物文化の象徴となっています。

鶯歌の陶磁器は、日用品から芸術作品まで多彩なスタイルを展開しています。日本の陶磁器が卓越した職人技と独自の文化的背景で知られるのに対し、鶯歌はかつて大量生産が主流でしたが、近年では品質やデザイン性が重視されるようになり、伝統と現代を融合させた表現で台湾独自の文化を映し出しています。1980年代には、鶯歌の陶磁器産業は黄金期を迎えましたが、流行の変化や賃金の上昇、生産コストの増加などの要因により、徐々に停滞するようになりました。多くの業者は自動化生産や精密陶器への進出、観光工場や体験型ブランドへの転換を図り始めました。行政側も陶窯（とうよう）博物館の設立や老街の再整備、イベントやカーニバルの開催を通して、地域産業の活性化に取り組んでいます。

2000年以降は、陶器博物館のオープン、老街の改造、文化観光の推進により、観光と文化が共存する陶磁器産業の姿が形作られてきました。2020年から台湾設計研究院が「T22デザインによる地域産業振興計画」を通じて国内外のデザインの力を導入し、伝統ブランドの再構築を支援。また、旅行会社との協力により「Open Factory工場見学企画」を立ち上げ、ものづくりの現場を地域観光の重要資源として位置づけています。

現在、鶯歌では美術・芸術がますます広がりを見せています。新北市立美術館と周辺の陶芸スポットが、ともにこの街の新しいイメージを描き出しています。鶯歌を訪れたなら、まず台湾陶器の発展の流れを知ることができる「鶯歌陶器博物館」は外せません。また、百年の歴史を持つ「新旺集窯」が設立した博物館では、ブランドの視点から陶芸の技術と変遷を紹介します。「安達窯」は、伝統技法を現代デザインに融合させつつ、鶯歌の陶芸精神を受け継いでいます。

陶芸文化にとどまらず、鶯歌

の街には日々の暮らしに創造性を添えてくれるショップやカフェも点在しています。「日和（Hei）」ではセレクト雑貨やスイーツを通じて、焼き物と日常生活との現代的なつながりを示しています。「三合号」ではノスタルジックな古民家空間の中で、昔懐かしい食材を取り入れたランチを提供し、味覚を通じて文化を感じさせてくれます。もしも陶磁器産業の新たな息吹に触れたければ、「陶聚」や「釉葉堂」がおすすです。実際に製作工程や原材料、道具などを体験することで、鶯歌の文化の奥深さとその活力を体感できることでしょう。

川沿いの現代美術館から、路地裏の陶芸工房や個性あふれるショップまで、鶯歌の物語は、窯の炎の赤からアートの彩りへと移り変わっています。気になる陶芸工房にふらりと立ち寄って、目で楽しむのもよし、手で体験するのもよし。芸術が生まれる熱気と楽しさを、ぜひ肌で感じてみてください。



① 新北市立美術館

今年（2025年）正式に開館した新北市立美術館は、メイン館と「新美聚場」の二つの空間で構成される。鶯歌・三峽エリアで秋から冬にかけて見られる葦や、大漢溪の河床の風景から着想を得た設計で、従来の美術館に見られる閉鎖的な印象とは異なり、より日常に溶け込んだ空間となっている。

Info 新北市鶯歌区館前路300号
● 火曜～金曜 10:00-17:30、土曜・日曜 10:00-18:00、月曜休館



② 新北市立鶯歌陶瓷博物館

台湾初の陶瓷をテーマにした博物館であり、現代建築と地元の陶芸文化を融合させた空間。館内では製陶産業の発展や芸術的な陶芸作品が展示されているほか、親子で楽しめるインタラクティブエリアや屋外アールスペースも併設されている。台湾の陶瓷文化を深く知るのに最適なスポットだ。

Info 新北市鶯歌区文化路200号
● 月曜～金曜 09:30-17:00、土曜・日曜 09:30-18:00



③ 陶聚 Tao Ju

盛昌陶瓷の三代目が立ち上げたブランドで、従来のOEM製造や大量生産のビジネスモデルから脱却し、精緻な工芸と革新的なデザインへと舵を切った。さまざまな形状の器づくりや釉薬の調合を得意としている。毎年10月頃になると、工房見学や体験教室が開かれている。

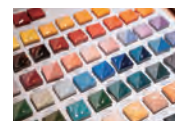
Info 新北市鶯歌区永昌街64号
● 09:30-18:00、土曜・日曜定休



④ 釉薬堂

国内外のさまざまな釉薬、陶芸用原料、道具、設備などが揃う専門店。店主自身も経験豊富な陶芸家であり、技術や知識、素材に関する豊富なサポートを提供している。陶芸に携わる人には見逃せないスポット。

Info 新北市鶯歌区永昌街58号
● 09:30-17:30、金曜～日曜定休





⑦ 三和號 Summer House

鶯歌公設市場に隣接する古民家をリノベーションしたランチカフェ。定番の朝食メニューのほか、粿（大根餅）や滷肉麵（ルーロー麵）など、昔ながらの台湾式軽食も提供している。店内には台湾の古道具や鶯歌の古い建物を描いたイラスト、選りすぐりの陶芸作品が並び、独自の世界観を醸し出している。



📍 新北市鶯歌区和平街3号
🕒 06:30-13:00、月曜定休

⑥ 日和LiHer

老街の近くにある「日和 LiHer」は、打ちっぱなしコンクリートの建築を特徴とする。デザイン性の高い手作りの器に、地元食材を使ったスイーツを盛りつけ、陶器と日常生活の融合を現代的に表現している。店内では、鶯歌にちなんだ DIY 教室も随時開催されている。



📍 新北市鶯歌区永昌街11号
🕒 12:30-18:00、火曜・水曜定休

⑤ 安達窯（鶯歌フラッグシップ店）

1976年創業の安達窯は「青磁」で知られてきた。2代目が事業を継いでからは、オーダーメイド製作や体験教室を始めた他、茄苳袋（台湾の伝統バッグ）の縞模様や繁体字など、台湾らしさを取り入れた日常使いの器も作っている。外務省の海外からの賓客への贈り物にも度々採用されている。



📍 新北市鶯歌区尖山埔路54号
🕒 10:30-18:30

SPORTY TAIWAN

台湾プロ野球観戦 完全ガイド！

応援ソング、チアリーダー、球場グルメ、
全部まるごと楽しもう！



近年、台湾プロ野球は国際大会で目覚ましい活躍を見せており、昨年（2024）「WBCプレミア12」で世界一に輝いたこともあって、再び台湾国内の野球熱が高まっています。台湾で野球観戦をするとは、単にスポーツの試合を観るというだけでなく、音楽、ダンス、美食、歓声と笑い声が響き合う、一種の祭典に参加する体験です。チアリーダーのエネルギーギッシュなダンス、観客全員で声を合わせて応援する一体感、そして多彩なローカルグルメ。

この時スタジアムは、街の中で最も熱く、最も温かみのある場所になります。

台湾での「野球観戦旅行」は、スタジアムに足を踏み入れた瞬間から五感をフルに使って楽しめるカルチャー体験になることでしょう。

チアと応援文化、 野球観戦から参加 型パーティーへ！

台湾プロ野球の応援文化は、世界で唯一無二のものと言えます。各チームにそれぞれ独自の応援スタイルと専属チアリーダーがいて、観客はただ座って試合を見るのではなく、音楽に合わせて全身を動かす、応援コールを叫び、ボードを掲げて手を振る、まるで音楽フェスのような熱気に包まれます。

楽天モンキーズのチアチーム「Rakuten Girls」は、なかでも最も象徴的な存在として知られて



います。前身の「Lamigo」時代に韓国風のEDM（エレクトロニック・ダンス・ミュージック）応援スタイルを取り入れたのが始まりで、その後は『全猿主场』（オールモンキーズホーム）という圧巻の応援ムードを作り上げました。スタジアムにはDJブースと応援専用エリアが設けられ、リズムカルな応援歌とダンスが融合し、毎試合がまるでライブパフォーマンスのような盛り上がりを見せます。

一方、中信兄弟の「Passion Sisters」は、力強く迫力あるスタイルを特徴とします。バスタームのリズムと揃った掛け声で、スタンド全体が一つにまとまるような気分を演出し、ファンはまるで何かの儀式に参加しているかのよう

に、声とリズムでひいきの選手を力いっぱい応援します。統一ライオンズの「Uni Girls」は、最も「台湾らしさ」が詰まった応援チームです。台湾語ポップソングや廟会（台湾の伝統的なお祭り）の銅鑼・太鼓の音を取り入れた応援ソングに、「尚勇（シオンヨン 最強!）」など台湾語の掛け声加わり、スタジアムはにぎやかでどこか懐かしいお祭りのような雰囲気になります。

選手一人ひとりには専用の応援歌と掛け声があり、観客はそれぞれのリズムやフレーズをしっかりと憶えています。チアリーダーたちはまさにアイドルのような存在となっており、各メンバーに背番号が付けられ、Tシャツやタオル、うちわなど多彩なグッズまで販売されています。中でもPassion Sistersメンバーの嵯峨（チュンチュン）は、台湾ばかりか日本でも高い人気を誇り、彼女の応援を見るために日本から来台するファンもいるほどです。

台湾式スタジアムグルメ、 観戦しながら「ちそう三昧」！

台湾のスタジアムは、ただ試合を観る場所ではありません。

そこは、まるで移動する台湾味の屋台村。各球団の本拠地では、地域ごとの特色を活かしたグルメがそろい、フライドチキン、滷味（ルーウエイ）台湾風煮込み、タピオカ入りかき氷、バーベキュー、台湾料理まで、バラエティ豊かなメニューが並びます。試合観戦というより、グルメ中心の観光イベントに参加しているような感覚にも陥るかもしれません。

台南を拠点とする統一ライオンズは、台湾で初めて「外野バーベキュー席」を導入した球団として知られています。彼らの本拠地「台南市立棒球场」（棒球场は野球の意）は日本統治時代に建てられた、台湾で最も歴史ある球場のひとつです。現在では、外野エリアに自前のバーベキュー道具を持ち込むことができ、煙と香ばしい匂いが立ち込めるなかで熱戦を見守るという、南台湾らしい情熱とホスピタリティを感じさせるユニークな体験ができます。

楽天モンキーズの本拠地「楽天桃園棒球场」は、創意あふれる球場飯とハイグレードな設備で人気を集めています。とくに注目すべきは期間限定で欣葉台菜な



どの有名グルメブランドを招く『大聖席』。台湾料理、火鍋、焼肉セットなど、ハイクオリティなメニューが登場し、ビブグルマンに選ばれた屋台料理も楽しめます。また桃園市の地域名から名づけられたVIPボックスは、冷房、テレビ、ドリンク飲み放題など、ゆったり観戦できる快適な空間が整っています。

味全ドラゴンズの本拠地「台北市立天母棒球场」には外野席がありませんが、その代わりに「キャンパススタイルのバーベキュー観戦席」が用意されています。テントとアメリカンBBQ、台湾クラフトビール「金色三麦（チンスーサンマイ）」の組み合わせで、まるでバカンスのような気分。イベントデーには席数限定の「おしゃれテント席」も登場し、家族やグループでの観戦にもぴったりです。

ひと味違う、 熱狂の都市観光体験

日本の旅行者にとって、台湾の野球場での観戦スタイルはさくぶる新鮮に映ります。何よりの魅力は「一緒に参加して楽しめる」ことです。チアリーダーによる盛り上げ、ファン全員の掛け声や大合唱、試合後の記念撮影や応援交流など、たとえ野球のルールをよく知らなくても、存分に楽しめる都市体験がここにあります。今度台湾旅行を計画する際は、ぜひ一度「球場体験」をプランに加えてみてください。チアリーダーのリズムに合わせて声を上げ、台湾のファンと一緒にタオルを振り、歓声を響かせる、その一体感と感動は、きっと忘れられない思い出になるはずです。

各応援チームの特徴を 体験できる おすすめ球場

台湾唯一のドーム型スタジアム

台北ドーム（台北大巨蛋）

交通：MRT ブルーライン「国父紀念館駅」4 番または 5 番出口すぐ
住所：台北市信義区忠孝東路四段 515 号

味全ドラゴンズ本拠地

台北市立天母野球場

応援チア：Dragon Beauties（ドラゴン・ビューティーズ）
交通：MRT レッドライン「芝山駅」下車、野球専用バスまたはシャトルバス紅 15 に乗車、または「士林駅」下車後、シャトルバス紅 12 に乗車
住所：台北市士林区忠誠路二段 77 号

富邦ガーディアンズ本拠地

新北市立新莊野球場

応援チア：Fubon Angels（フボン・エンジェルズ）
交通：MRT オレンジライン「新莊駅」1 番出口から徒歩約 12 分
住所：新北市新莊区興街 66 号

楽天モンキーズ本拠地

楽天桃園野球場

応援チア：Rakuten Girls（楽天ガールズ）
交通：桃園空港 MRT で A19 桃園体育園區駅下車、改札を出て右に曲がり直進。
住所：桃園市中壢区領航北路一段 1 号

中信ブラザーズ本拠地

台中インターコンチネンタル野球場（台中洲際棒球场）

応援チア：Passion Sisters（パッション・シスターズ）
交通：高铁台中駅から MRT で「文心崇徳駅」下車、バス 12・58・58 副に乗り換え
住所：台中市北屯区崇徳路三段 835 号

統一ライオンズ本拠地

台南市立野球場

応援チア：Uni Girls（ユニ・ガールズ）
交通：台鉄台南駅下車後、バス 0 左・0 右・5・88・8046 で「體育公園」下車
住所：台南市南区健康路一段 257 号

台鋼ホークス本拠地

高雄市立澄清湖野球場

応援チア：WING STARS（ウィング・スターズ）
交通：高铁左營駅から MRT で「衛武營駅」下車、バス 70 番で球場へ
住所：高雄市鳥松区鳥松里大埤路 113 号

台湾プロ野球 観戦ミニガイド

シーズン期間：

毎年 3 月頃～10 月
（ポストシーズンは 11 月まで）

チケット購入方法：

tixCraft 公式サイト、各球団の公式 HP またはアプリにて購入可能

※ 1 週間以上前の購入がおすすめです。テーマイベントや人気チアが出演する日は特に人気です！



台湾鉄道観光：

Text & Photo／劉昭輝

台湾一周スロー旅 × 支線で秘境探し

台湾には都市から田園、海岸から山林まで広大な鉄道網が整備されています。列車で移動しながら、ぶらりと途中下車して周りを歩けば、誰でも気軽にこの土地が秘める景色をじっくり探訪しながら、島をぐるりと一周することができます。こんな旅の

スタイルは手軽で便利なだけでなく、台湾の文化と自然の美しさを深く味わえる方法でもあります。本稿では、台湾鉄道の特色ある支線：平溪線、内湾線、そして八斗子の深澳レールバイクを取り上げ、「鉄道＋徒歩」で楽しむディープな旅をご紹介します。

鉄道＋徒歩旅の魅力

台湾一周が容易

台湾を一周する鉄道路線網は東西南北にわたって整備されており、都市部から田舎までのアクセスも容易で、時計回り・反時計回りのどちらでもぐるりと廻ることができます。

ディープな探索

駅を降りて散策に出れば、歴史ある街並みや自然豊かな景色、地元グルメを楽しみながら、じっくりと地域の魅力に触れられます。

環境に優しい旅

鉄道＋徒歩はカーボン排出量を抑え、環境にやさしいスタイルで台湾の美しい風景を楽しめます。

環島スロー旅行：
火車＋徒歩の旅、
ゆったり味わう台湾の風情

台湾の鉄道ネットワークを利用すれば、車や大型交通機関に頼ることなく、列車と徒歩で秘境スポットを気軽に訪れることができます。快適で利便性の高いこの旅のスタイルは、高齢者や海外からの旅行者にも特におすすめです。レンタカーや運転の煩わしさを避け、地域文化により近づくこともできます。

POINT

台湾の特色ある鉄道支線では、ローカル文化を深掘りしながら、自由なスロートラベル体験ができます。

平溪線：山間の町を巡り、 天燈のロマンを探す

平溪線は台湾で最も代表的な支線のひとつ。山林や溪谷を通り抜け、壺穴などの独特な地形を横切りながら、歴史と文化が息づく駅々をつないでいます。



おすすめの徒歩スポット



1 菁桐駅

レトロな木造の百年駅舎。願い事を書いた竹筒を駅のそばに掛け、願いを風に乗せて届ける体験や、炭鉱遺跡巡りなどが楽しめます。

2 平溪駅

天燈を空に飛ばす活動で知られる、歴史情緒あふれる駅。駅周辺の景色も旅情を高めてくれ、鉄道が醸し出す独特な懐かしさも感じられます。

3 十分駅

願い事を書いた天燈を空に放つ、夢のようなひととき。線路の上で火を灯した天燈が空高く舞い上がっていくさまはロマン満点。近くには台湾のナイアガラの滝「十分瀑布」も。



十分瀑布



4 猴硐駅

猫好きにはたまらない「猴硐猫村」。屋根の上や日向でくつろぐ猫たち、駅でも猫の駅長さんが来訪者を迎え、その愛らしさに思わず心がとろけます。ここではまた鉱業の歴史的建造物を訪ねる体験も楽しめます。



POINT

平溪線の列車はゆっくりと走るため、のんびり車窓の景色が楽しめます。沿線を歩いて散策することで、一層深い地域文化にも触れられます。

深澳レールバイク： 海と空に包まれるサイクリング体験

深澳レールバイクでは、廃線となった鉄道跡を走る特製自転車で海岸線の絶景が楽しめます。

※レールバイク体験は事前にネット予約が必要。



おすすめの徒歩スポット

1 潮境公園

雄大な海岸と潮間帯の生態系を歩いて探索できる。

2 深澳漁港

番仔澳酋長岩、深澳岬角、自然の岩石景観を歩いて巡り、壮大な景色を堪能できる。

POINT

八斗子駅からレールバイクに乗り、その後歩いて海岸を探索。海が空と溶け合うような絶景が広がるシーサイドカフェは、台湾北海岸の魅力を最もダイレクトに感じられる最高のスポットです。



海外旅行者におすすめの「鉄道＋徒歩」で巡る台湾一周ルート



各支線鉄道への
アクセス

平溪線

台北駅から台鉄（台湾鉄道）に乗り、瑞芳駅で平溪線に乗車。

深澳線

台北駅から台鉄で瑞芳駅まで行き、深澳線（平溪線とは逆方向）に乗り換えて八斗子駅へ。そこから深澳レールバイクも体験可。

内湾線

台北駅から台鉄で南下し、新竹駅で内湾線に乗り換える。または高鐵（新幹線）新竹駅から六家線で竹中駅まで行き、内湾線に乗り換える。

POINT

列車と徒歩を組み合わせて台湾鉄道の支線を旅するこれらのコースは、旅人に台湾の深い魅力を探検し体感させるだけでなく、ゆったりとしたスロートラベルのリズムも味わわせてくれます。支線鉄道の旅は、山間の町、客家文化、海岸サイクリング……いずれをとっても心に残る思い出となるでしょう。

内湾線：レトロな町並みで 客家文化に触れる

新竹エリアに位置する内湾線は、山や溪谷を抜け、客家文化の香る小さな町を巡ります。



おすすめの徒歩スポット

1 内湾駅

レトロな街並みや客家風情漂う老街を散策。漫画家・劉興欽（リウ・シンチン）の故郷で、作品展示や発明品を鑑賞できます。歴史情緒の中、往年の映画館や客家グルメを楽しむこともできます。



2 合興駅

「愛の駅」として知られたロマンチックなスポット。1958年、列車内で男女が出会い、のちに男性は、自分が乗り遅れた列車に乗る彼女を追いかけて線路沿いを2.1キロも走り、ついに追いつくことができました。二人はその後、結ばれて夫婦となります。のちに合興駅が廃止の危機に瀕した際、二人はこの駅を引き取り、保存のため尽力しました。現在では「愛の駅」として生まれ変わり、幸福とロマンスの象徴として多くの人が訪れる観光名所となっています。

POINT

列車で内湾まで行き、そこから徒歩で老街や周辺を散策することで、客家文化の魅力を深く味わえます。



台湾鉄道旅についてより詳しく知りたい方は、Facebookの人気グループ「599坐火車慢遊台灣」（会員数140万人）をチェックしてみてください。台湾の熟年世代の方々が、グループ旅行、個人旅行で、列車で台湾を巡り、人生の新しいステージを彩り豊かに過ごしている様子をシェアしています。さあ、リュックを背負い、列車に乗って、台湾の鉄道＋徒歩旅に出かけましょう！

599 玩久久／劉昭輝

Facebookグループ『599坐火車慢遊台灣』（599電車でゆっくり台湾をめぐる会）創設者。アウトドア活動や地域の歴史文化、台湾語、漢詩の吟詠が趣味で、新しいことを学び体験しながら、人生の後半も充実した日々を送ることをモットーにしている。



CHITCHATTING OVER COFFEE

「生まれ変わっても炭水化物」の彰化魂

Text／劉梓潔・Photo／Sia Sia Lee、張志偉

ふるさとを離れてからというもの、あちこちでよりどりみどりの炭水化物が食べられるようになった。けれど、見た目も美しく手の込んだブラウニー、モンブラン、スフレ、レアチーズケーキ、ミルクレープをひととおり食べた結果、やっぱりあの緑豆椪が食べられたらなあ、と思うことしきりなのである。

人は前世のしるしと執着をもって生まれ変わるといふけれど、ならば私のような彰化人は、きっと彰化人として、臨終にはひたすら、彼の地に再び生まれることを願うのだろう。そう、それは炭水化物の王国である。

オギヤアと生まれ落ちたそのときからしつけは始まる。幼い頃から大餅、肉圓、豚角煮ご飯、桂圓ケーキ、大元麻糬、牛舌餅、肉まん……。蛋黃酥や昔ながらのサンドイッチは、それより後の話である。彰化人の炭水化物へのこだわりっぷりはおちおち手を出すわけにはいかない。たとえ北部の都市で働き、根を下ろしたとしても、地元の人が訪ねてくるときに手土産に指定するのは、やはり肉圓（バーワン）一択である。

小さいころ、祖父母に連れられて、祖母の姉の一家に届けるため、熱々の肉圓を二袋下げて、統聯バスに乗って台北へ向かったことがある。耐熱ビニール袋にぎっしり詰められた白くてふっくらした揚げ肉圓が十個とおまけにもう一個、それとは別に特製のたれが小さく二つに分

けて包まれ、何重にも新聞紙でくるまれていた。油の香りとインクの匂いが混ざり合い、台北に着いた頃もまだほんのり温かかった。のちに低温宅配の技術が発達すると、台北に住む親戚などは、帰省するたび冷たい生の肉圓を一、二箱持ち帰っていた。自宅の冷凍庫で保存し、時折それを取り出して温め、体内に宿る「彰化魂」を満たすのであった。

私自身は肉圓にそれほど思い入れがあるわけでもなく、台北に住んでいたころよく買った彰化の手土産は寶珍香の桂圓ケーキである。小ぶりのカップケーキは同僚や撮影チームへの差し入れにもぴったりだった。今にして思えば、寶珍香の立地も理由のひとつで、まだ彰化に新幹線の駅がなかった頃、台中の新幹線駅まで向かう途中、必ず彰南路にある寶珍香の前を通るので、立ち寄って二箱ほど買っていくことが多かった。それから、大元麻糬の彩頭酥も私のお気に入り、友人たちからもかなりの好評を博した。ただ賞味期限がとても短いのと、店はお香の煙が立ちこめる城隍廟の入り組んだ路地裏にあり（今でも毎回グーグル

マップのお世話になっている）、車を停めにくいのが難点だ。もし寶珍香と大元と一緒に新幹線の台中駅に店を出せば、きっとパンの名店「眞寶春」よりも繁盛するはず。でも、老舗というものの本領は「わざわざ足を運ぶ」ことにあるのだろう。

ふるさとを離れてからというもの、あちこちでよりどりみどりの炭水化物が食べられるようになった。けれど、見た目も美しく手の込んだブラウニー、モンブラン、スフレ、レアチーズケーキ、ミルクレープをひととおり食べた結果、やっぱりあの緑豆椪（緑豆あんのまんじゅう）が食べられたらなあ、と思うことしきりなのである。親戚が多ければ祝い事も多い。彰化に帰省するたび、食卓には必ず婚約の引き出物である大餅が並ぶ。もしかすると、私の中華菓子への愛着はこうやって植えつけられたのかも知れない。ところが今や、若い世代の引き出物には、引き出しやリボンまで付いたフランス風のクッキーが人気だ。妹とあの大きな箱に入ったたつた九枚のクッキーを分け合った後は、すぐさま十五センチ、六〇〇グラムもある胡麻とクルミの入った黒豆あん肉餅を切り分けることになるのである。

お菓子のふるさと・台中に越して来てからは、手土産の選択肢がさらに豊富で多彩になり、よそから来た人を感動させるような名店も数えきれないほどだ。最初は、日出のバイナッブルケーキ、俊美の松の実ケーキ、陳允寶泉の和菓子など

雑誌『FOUNTAIN 新活水』とは

FOUNTAIN 新活水の毎号のテーマは社会の脈動と密接に関連しています。文化的観点から、地域・境界・世代を超えて交差する精神を強調し、重要な問題や現象の詳細な討論と発掘を行っています。鮮烈な視覚的美学が魅力の雑誌は文化的対話を構築するための重要なプラットフォームになっています。



Profile 劉梓潔 (エッセイ・リウ)

一九八〇年生まれの彰化人。作家、脚本家。『父の初七日』で林榮三文学賞散文部門最優秀賞受賞。同名映画の脚本を執筆し、台北映画祭で最優秀脚本賞、ゴールデンホースアワードで最優秀脚色賞に輝く。テレビドラマにも進出し、『微婚啓事』や『滾石愛情故事』などのシリーズ構成を担っている。著書に、散文集『父の初七日』、『此時此地』、『愛寫』、『化城』、短編小説集『親愛的小孩』、『遇見』、長編小説『真的』、『外面的世界』、『自由遊戲』、『希望你也在這裡』などがある。

お 気 に 入 り

Apple of My Eye



太陽餅 | 香格禮坊

台中人にとって、太陽餅には大きく分けて二つの派閥がある。ひとつは色が薄く、サクサクとして、口に入れた瞬間にとろけるような、ポロポロと皮がこぼれ落ちるタイプ。もうひとつは卵黄を塗って焼き上げた、崩れにくく、食感もしっかりとしたタイプだ。香格禮坊は後者で、濃厚なミルクの風味が詰まった餡と、手頃な価格が魅力である。私はハイキングの栄養補給として食べるのがいちばんお気に入り。

● 120NTD/箱 (5個入り)

📍 台中市北区梅亭街557号

を買っていたが、徐々に「地元の人だけが知っている」ところも開拓していった。例えば清水の喜利廉や、梅亭街にある香格禮坊などだ。ただひとつ、洪瑞珍のサンドイッチだけは、今でもあまり魅力を感じられない。南部の彰化人にとって洪瑞珍といえば、必ず「酥糖・酥餅」なのだ。酥糖とは海苔入りピーナッツ餡、酥餅は昔ながらの小桃酥だが、今や北斗の本店でしか作っていないようだ。

そして、私がひそかに愛してやまない手土産は、江記永安の中華式大餅である。アートの雰囲気のカフェ・默契と、きらびやかな高級クラブ・金銭豹の間に位置している。店ではさまざまな種類の大餅を試食でき、熱いお茶まで出してくれるのだが、決まってひとつしか買わない。それは杏仁糕(アーモンドケーキ)だ。ただ、もし裏メニューの黒ごま入り杏仁糕があった時は、決して見逃さない。とはいえ、人におすすめできるかというところ……。なめらかでぎつりと詰まった生地、人によってはこれが第一のハードルになる。次に味の濃いアーモンドも、パクチーと同じくらい好みの分かれるハードルだ。これは、彰化の炭水化物魂が宿る、孤高の味なのだ。もし、よそから来た人や外国人の友人に渡す手土産を買うとしたら、うん、やはり無難にパイナップルケーキにしておこうか。



杏仁薄餅 | 喜利廉

台中で「杏仁酥片」の専門店が多いが、薄焼きのクッキーを専門にするのは喜利廉だけ。薄く、軽く焼き上げられていて、あっさりとした上品な味わいだ。10枚ほどが四角いボックスに重ねて収まっており、お茶のお供にもふさわしい。ビターチョコレート味もまた絶妙な美味しさで、試す価値あり。

● 480NTD/箱 (6個入り)

📍 台中市清水区中山路333号 (清水店)

《山の音》

蘭陽三帖①

山之音——蘭陽三帖①
李敏勇 作



日が沈んだあと
星をちりばめた黒いビロードの幕が、森や草木にそっと垂れかかる

山が眠りにつくと

風の音が、心の想いと風景について、そっとささやき合う

落ち葉の音が聞こえ

霧の流れる音が聞こえる

軒先から水の滴り落ちる音が聞こえる

愛する人の心の鼓動が聞こえる

夢の中では

星の落ちる音までも聞こえてくる

やがて、日の出を迎えると

朝の光が雲を抜ける音と画眉鳥家族の清らかな歌声が

風とともに木の葉を揺らし

時間の脈動を測っていく

光が昇り

白昼が暗闇にかわって地球が動いていることを告げる

静寂はなお、白い紙のようにそこにあり

足音が苔むした階段の響きを刻む

交わされる言葉と笑い声は

沈黙を破るためにあり

世界と恋人のように争うものではない

より深い静寂は森の心にそっと秘められている

日落之後

繡著星星的黑色絨布垂落林木與植被

山要睡了

風的聲音一些細語交談著心情與風景

聽得見落葉的聲音

聽得見霧流動的聲音

聽得見水從屋簷滴落的聲音

聽得見愛人心跳的聲音

在夢裡

你甚至聽見星星掉落的聲音

而日出之時

晨曦穿經雲彩的聲音與畫眉鳥家族的清唱

與風一起吹動樹的葉片

計量著時間的脈動

光升起

宣示白日取代黑夜運轉地球

寂靜仍然是一張紙頁

記錄腳步起落在踏板青苔的聲音

一些話語和笑聲

是為了打破靜默

而非與世界情人似的爭吵

更多的寂靜貯藏在森林的心

Profile

李敏勇 リー・ミンヨン

台灣屏東人。1947年高雄で生まれ、大学時代は歴史を専攻。現在は台北市民。大学卒業後文学界に身を投じ、時誌「笠」の編集、「台湾文芸」社長、「台湾筆会」会長などを歴任。著書は『雲の語言』『暗房』『鎮魂歌』、中英対訳時集『思慕與哀愁』などの作品のほか、散文、小説、文学評論、社会評論集など90冊あまりを数える。巫永福評論賞、吳濁流新詩賞、頼和文学賞、第11回国家文芸賞、2022年第4回行政院文化賞受賞。



2025 世界賞鳥博覽會。

WORLD 1ST BIRD FAIR IN TAIWAN

Sep. 20-21, 2025

ぜひ「世界バードウォッチング博覧会」にご参加ください！

台湾および世界中の1万人以上のバードウォッチャーと出会えます。

新たに成長するバードウォッチングツアー市場を発見しましょう。

親しみやすい人々と、安全な旅行、美食の楽園があなたを待っています。

ビジネスパートナーとの対面ミーティングに参加できます。

公式記念品や公式ウェブサイトロゴを掲載できます。



公式サイト(Eng)

<https://www.2025wbfb.com.tw/>

ビビビ台湾

ビビビ台湾

ビビビ台湾

ビビビ台湾

ビビビ台湾

ビビビ台湾

ビビビ台湾

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ

臺灣のグルメ



したいことぜんぶ

ビビビ台湾



未知の台湾スイーツに出会いたい

